

## 第20回地域医療現地研究会に参加して

# 「市町村合併と地域医療ネットワークの構築」

～新たな医療文化の創造～

＜富山県・南砺市＞

国診協地域医療・学術委員会副委員長／広島県・公立みつぎ総合病院長

向井憲重

国診協の第20回地域医療現地研究会が平成18年5月25日(木)、26日(金)の2日間、全国津々浦々から290名の参加のもと、富山県・南砺市で盛大に開催された。

新尾道駅を起点に、新幹線「こだま」から「のぞみ」、京都から北陸本線「サンダーバード」に乗り継ぎ、富山県高岡市までの約2時間半を、時折流れる車内放送に耳を傾けながら、車窓からの琵琶湖や北陸の景色を楽しんだ。この路線は学生時代に随分とお世話になったものだが、大部分が夜行列車の利用であったため、外の景色にほとんど馴染みがない。あったとしても35年以上前のことであり、実に隔世の感であったろう。

高岡から城端線(高岡-福光)に乗り換え、やや霧がかかった曇天の田園風景を眺めているうちに、福光駅に到着。いったん、バスにて会場である井波総合文化センターへ直行。ここで開かれた地域医療・学術委員会の席上、鎌田実委員長から「今回の現地研究会報告は順番でいくと先生の番になりますね」と言われ、内心“これは厄介な仕事ができた”と思うもあとの祭りである。「どういう順番で私なのかな？」と狐に抓まれたような気分であったが、大変光栄なことと思っている。

委員会終了後、ふくみつ「華山温泉」へ入り、夕食は美味しい越中の料理と酒に舌鼓を打ち、のんびりと温泉を楽しませていただいた。

## 研修1日目 - 5月25日(木)

### 〔開講式〕

前日とはうって変わって朝から好天に恵まれ、井波総合文化センター「メモリアルホール」において午前10時30分より開講式が行われた(写真1)。

まず初めに、主催者として国診協の富永徳徳会長から「国は21世紀に相応しい社会構造を確立すべく、医療においても構造改革を行っている。国保直診は市町村合併と医療制度改革という大きなうねりに直面し、3,232あった市町村が本年4月には1,821市町村となり、国保直診の65%が合併後の市町村にある。すでにいくつかは民間に移譲されており、今後、対応を誤ると国保直診が減少することになりかねない。このため、経営の合理化・効率化を図り、広域化した地域の連携が求められる。一方で、本年4月より3.16%の診療報酬引き下げがあり、6年後には介護療養型病床の廃止が決定している。国診協では5月18日に『診療報酬改定・療養型病床に関する研修会』を開催し、現状の把握を行った。国診協・国保直診は、一貫して地域包括ケアシステムの実践と地域包括ケアシステムの構築を理念とし、行政と一体となって保健・医療・福祉(介護)

の総合的・一体的サービスを提供し、地域づくりに貢献してきた。新しく導入された介護保険の新予防給付制度は私達が実践してきたことが認められたものと理解しており、このことは私たちの誇りである。合併前の多くの市町村における住民意識調査でも『保健・医療・福祉の充実した町』を求める声をもっとも多い。このような時期に、平成16年11月1日に4町4村の合併により新市となった南砺市において“市町村合併と地域医療ネットワークの構築”をテーマとし、地域医療現地研究会が開催されることは大変意義深いことである。実り多い地域医療現地研究会となることを期待している」との挨拶を述べられた。

続いて、開催地の溝口進・南砺市長が、「南砺市は平成16年11月1日に8町村が合併して誕生した人口5万8千人の新市である。面積は琵琶湖（滋賀県の6分の1の面積）の大きさに匹敵し、富山県では2番目に大きな面積を有する。そのなかに3病院・4診療所を有しているが、3病院はそれぞれが歴史や組織文化に違いがあり、理念や活動方針も異なっていたことから、これらを市立病院としてまとめ、効率的な運営を図る目的で本年4月に『南砺市医療局』を設置した。具体的な活動や業務改革はこれからであるが、今後を期待している。3病院とも電子カルテが整備され、緊密な連携体制が整っている。当市の包括医療体制と各病院・診療所を含めたネットワーク構築の実際をご覧いただき、忌憚のないご意見をいただきたい」と歓迎の挨拶を述べられた。

次いで、来賓の椎葉茂樹・富山県厚生部次長から祝辞が述べられた。なお、唐澤剛・厚生労働省保険局国民健康保険課長が国会用務のため急遽欠席のため、祝辞を事務局から披露した。

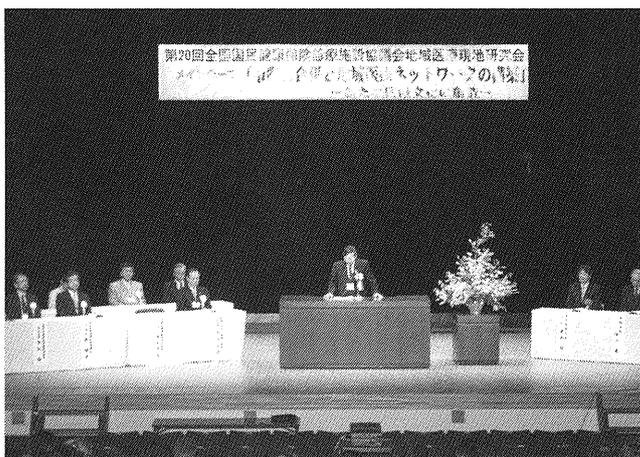
## 【研修施設概要説明】

開講式に続き、倉知圓・南砺市医療局管理者／南砺市民病院長から研修施設の概要について簡潔でわかりやすい説明が行われた（施設視察研修の項で詳述）。

### ◆南砺市医療局

南砺市は岐阜県白川村に隣接し、平成16年11月1日、

写真1 井波総合文化センターで行われた開講式



4町4村が合併して誕生した人口約5万8千人の田園都市であり、南砺市民病院、市立福野病院、公立南砺中央病院の3病院と井口、利賀、平、上平の4診療所を抱えているが（図1）、この南砺市の病院、診療所へは富山県から自治医科大学卒業医師が計4名派遣されている。

これら複数の市立医療機関を統括運営し、効率的で安全な医療を提供する目的で、平成18年4月、公立南砺中央病院内に「南砺市医療局」が設置された。この医療局の理念は「南砺市民の健康で豊かな生活を支えるために、市立医療機関としてあるべき姿を追求し、市民の信頼に基づいた良質で安全かつ効率的な医療提供体制を構築する。また、市民の視点に立った地域包括ケアシステムを実現する」とされ、基本方針として、①3病院の設置理念を南砺市医療機関として統一し、必要な役割を共有あるいは分担する、②経営理念と運営方針を可能な限り統一化する、③良質で安全かつ効率的な医療の実践をめざし、市民の信頼を得る、④疾病予防、介護予防活動を含めた地域包括ケアシステムを構築する——の4項目を規定している。

厳しい医療情勢のなか、南砺市の医療事業の改善と安定・発展に期待が寄せられており、病院間（とくに福野病院とは診察券を共有）あるいは診療所間および南砺市医師会との緊密な連携が重要であり、同一電子カルテの共有、また画像伝送システムなどの導入により、放射線科医師による遠隔画像診断も行われている。

図1 3病院4診療所の医療ネットワーク

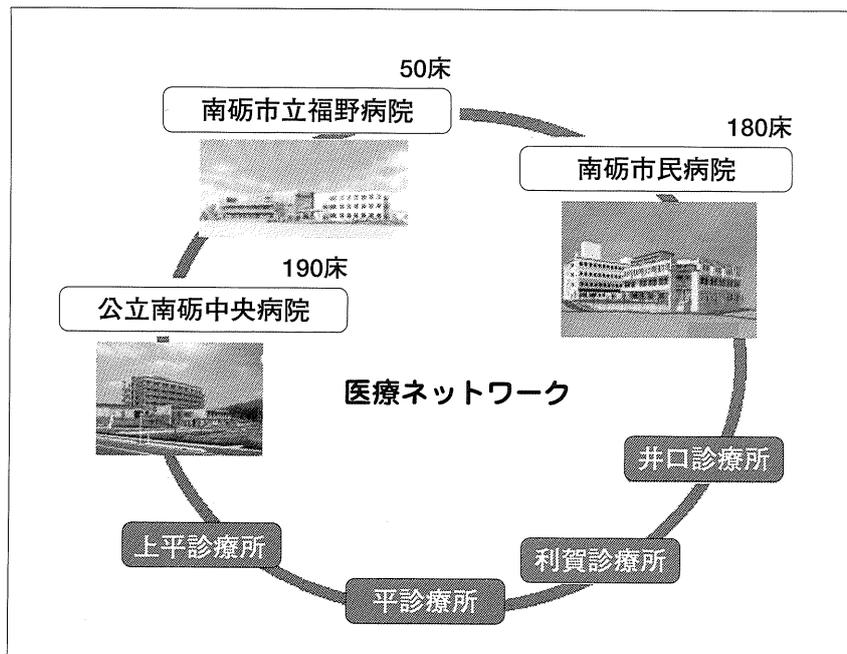


写真2 南砺市民病院



一となり、在宅介護支援センター2か所、訪問看護ステーション2か所、デイサービスセンター4か所、ホームヘルプステーション2か所を運営している。いわば事業所の連合体ともいえる。南砺市の要介護認定者は平成17年3月の2,351人(14.3%)から18年3月には2,530人(15.3%)と、要介護認定率が1年間で1%上昇している。地域別に在宅と施設の利用率をみると旧町の4地域の施設利用率が高いのに対し、旧村は在宅の利用率が高いという結果である。介護サービス利用者は増加する一方で、施設サービス利用費用は高額であるため、南砺市の介護保険組合負担の増加につながる心配が生じており、今後の課題とのことであった。

### 【施設視察研修】

開講式、施設紹介終了後、10班に別れ、バス5台に分乗し施設視察研修を行った。

#### ◆南砺市民病院

南砺市民病院(写真2)の理念は「医療・保健・福祉活動を通じて、市民の健康で豊かな生活に貢献します」で、基本方針は、①市民の視点に立ち、市民とともに歩む病院にします、②質の高い安全な医療を公平に提供します、③市民が、その人らしい幸せな生涯を

写真3 ポスター展示による説明



写真4 回復期リハビリ病棟



写真5 ベッドサイドでの電子カルテ操作

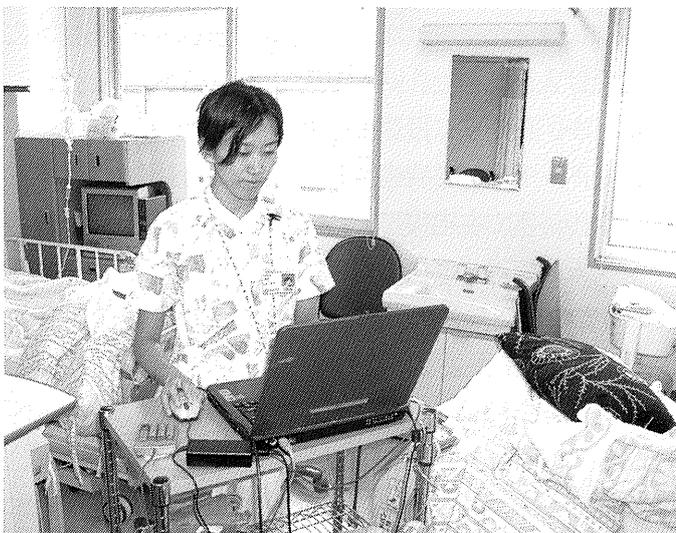


写真6 「コントDE健康」



過ごせるよう支援します——と定めている。

病床数は180床（一般144床、回復期リハビリ36床）、17診療科、さらに人工透析15床を有している。

自慢のポイントとしては、①地域マインド（職員に地域マインドを植えつける）、②優しさ・丁寧さ（実際、市民から褒められている）、③地域包括ケアの実践（もっとも大事）、④バランスの取れた医療サービス、⑤活発な委員会活動、⑥電子カルテの活用（平成14年10月運用開始）、⑦医療機能評価機構認定病院（今年がすでに更新の時期）、⑧DPC（全国の自治体病院で唯一の試行適用病院）、⑨組織マネジメント手法の習

得（現在、努力中とのこと）——などをあげている。

視察研修にあたっては、A：病院内支援システムグループ、B：地域支援・在宅支援グループ、C：リハビリテーション活動グループ、D：保健活動グループ、E：診療支援活動グループ、F：回復期リハビリ病棟グループ、G：急性期病棟視察グループ、H：病院内診療活動グループなど8グループの各担当者からポスター展示による丁寧かつ詳細な説明をいただいた（写真3）。とくに、回復期リハビリ病棟は贅沢なほどのスペースが確保され、また機能的に設計されており、通所リハビリも兼用している（写真4）。

私にとって今回の視察研修の目的の一つが電子カルテであった。さすがにナース・ステーションに紙らしきものはカルテを含めて見当たらない。代わりにパソコンが置いてあるだけ。操作性も素晴らしく、気持ちよいほどのスピードで画面切り替えが可能であり、現在、電子カルテ導入中の私たちにとって大変参考になった(写真5)。

ソフト面では、寸劇を交えた出前健康講座「コントDE健康」がなかなか興味深い(写真6)。平成8年に第1回を開始して以来、すでに108回を重ねている。医師、看護師、薬剤師、理学療法士、作業療法士、栄養士、放射線技師、検査技師、MSW、事務職員など、あらゆる職種が入り混じり、平均月1回のペースで公演依頼をこなしている。出し物も「糖尿病の巻」、「高血圧の巻」、「認知症の巻」など30種類にも及び、職員間のよき交流の場ともなっている。一石二鳥である。

一方、多くの国保直診と同じく、医師・看護師不足でその確保には大変苦勞されているとのことである

次に、リハビリテーションが自慢の一つであることは事前に知らされていたので、同行の当院主任作業療法士から専門家としてみた報告を掲載することをお許しいただきたい。

<視察研修報告>:「南砺市民病院のリハビリテーション活動は診療室、物理療法室、運動療法室、作業療法室、言語聴覚療法室などを合わせた総合リハビリテーション室(総合リハビリテーションA施設、言語聴覚療法Iの施設基準、なお、今回の診療報酬改訂では脳血管疾患リハビリI、運動器疾患リハビリI、呼吸器疾患リハビリIを取得)、回復期リハビリテーション病棟、デイケアセンター、訪問看護ステーション、地域リハビリテーション広域支援センター等を中心に運営されていた。

スタッフは平成18年4月より、リハビリ専任医2名(うち1名は回復期リハビリ病棟専任医)、リハビリ兼任医1名、リハビリスタッフは急性期担当PT5名、OT5名、ST3名、助手2名。回復期病棟担当PT4名、OT4名、ST1名。デイケアセンター担当PT1名、OT1名。訪問看護ステーション担当PT3名、

OT3名。また、分院である南砺市立福野病院にPT1名、OT1名が配属され、マンパワーは充実していた。

急性期のリハビリは急性期担当療法士を中心に急性期病棟でのベッドサイドリハビリとリハビリ室を利用した機能回復訓練、ADL訓練が中心であった。対象患者は整形外科・脳血管障害が多かったが脳血管障害は保存的治療のケースが多かった。回復期病棟と連携しながら機能回復訓練とADL訓練、廃用症候群および二次的障害の予防を中心に行い、回復期病棟へ橋渡ししていた。

回復期のリハビリは急性期病棟から行っていたが本格的には回復期病棟(35床)へ転棟してから行われていた。対象患者は、疾患では整形疾患が多く次に脳血管疾患が多かった。また、南砺市民病院急性期病棟からの転棟者だけではなく他の医療施設からの転院も広く受け入れていた。ハード面では、広い廊下と食堂・ホール、各病室には3モータ低反発マットレス搭載の電動ベッドが標準装備され、浴室は介護用ではなく家庭用の浴室で在宅復帰を見据えた構造となっていた。ソフト面では、療法士の早出・遅出・休日出勤による365日のモーニングケア、イブニングケアの提供と病棟ADL訓練、必要に応じてリハビリ室を使った機能回復訓練を行っていた。また病棟内では医師、看護師、MSW、療法士で定期的にカンファレンスがもたれ、リハビリのゴールを明確にするとともに、在宅復帰に際してはソフトランディングな退院に向けて、ケアマネジャーや在宅サービス事業者と連携しケアプランに積極的に関与するため、退院前訪問・退院時指導・退院後訪問等を積極的に行っていた。在宅復帰率は92%と全国的にも高い数字を出していた。

維持期のリハビリはリハビリ室での外来リハビリだけでなく、デイケア(定員30名)での通所リハビリ、とくに、介護予防を目的とした運動器の機能向上(マシントレーニング)に力を入れていた。リハビリ室には6台の筋力向上トレーニングマシンが装備されていた。また、通院・通所だけでなく、訪問リハビリにも力を入れていた。

さらに、地域リハビリへの活動として、南砺市民病

写真7 福野病院外来ロビー



写真8 福野病院での説明

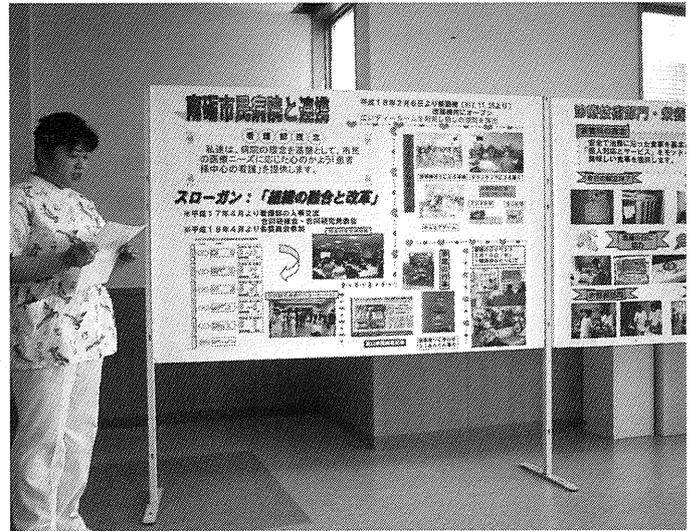


写真9 公立南砺中央病院正面



院は地域リハビリテーション広域支援センターの指定を受け、地域リハビリテーション運営会議を年2回、地域リハビリテーション研修会を月1回開催されていた。さらに、介護予防教室や健康教室、リハビリ教室、特別養護老人ホームの指導等の地域リハビリ支援活動や地域における患者会の支援なども行っていた。

以上のように、南砺市では南砺市民病院が中核となって地域包括ケアシステムのもとに積極的なリハビリテーション活動が展開されていた」

(公立みつき総合病院主任作業療法士 小柴 浩次)

#### ◆南砺市立福野病院

昭和27年9月に内科、外科、小児科、産婦人科の4科、35床で設立されたが、平成16年11月の合併により、病院名を改称し、療養環境整備のため平成17年3月に病院増改築工事に着手し、18年3月に完成したばかりである(写真7)。

現在、一般病床50床で診療は内科、外科、整形外科、小児科、リハビリテーション科の5科で行っている。理念ならびに基本方針は南砺市民病院と共通であり、診察券も共有している。ここでも南砺市民病院との連携につき、ポスターによる詳細な説明を受けた(写真8)。

#### ◆公立南砺中央病院

昭和24年の開設であるが、平成16年11月1日に南

砺市が誕生。これにより2つの市立病院と公立南砺中央病院の3つの公的病院が存在することとなったが、3病院の経営・運営の一体化で、地域住民の医療サービスを確保するため、平成18年3月31日、南砺広域連合は解散し、翌4月1日より南砺市立の公立南砺中央病院として診療にあたっている(写真9)。理念は「南砺地区における、21世紀の新しい自治体立病院として、患者本位の視点に立って「住民が利用しやすく、患者に親切な病院」、「福祉施策と連携した高齢者にやさしい病院」、「住民に愛され、信頼される病院」を目標に、住民がいつでも安心して必要とする医療サービス受けられるように、医療水準の維持・向上に努めます」と

図2 放射線医師による遠隔診療

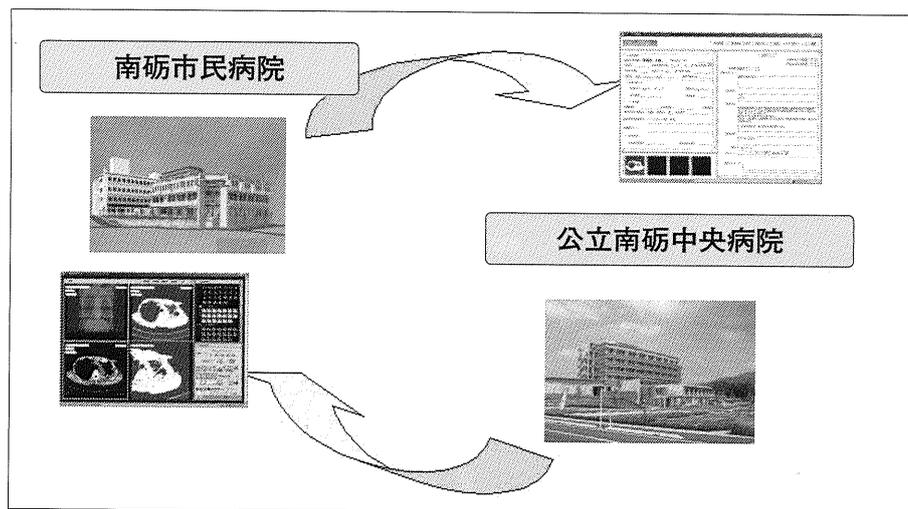


写真10 公立南砺中央病院外来診察室

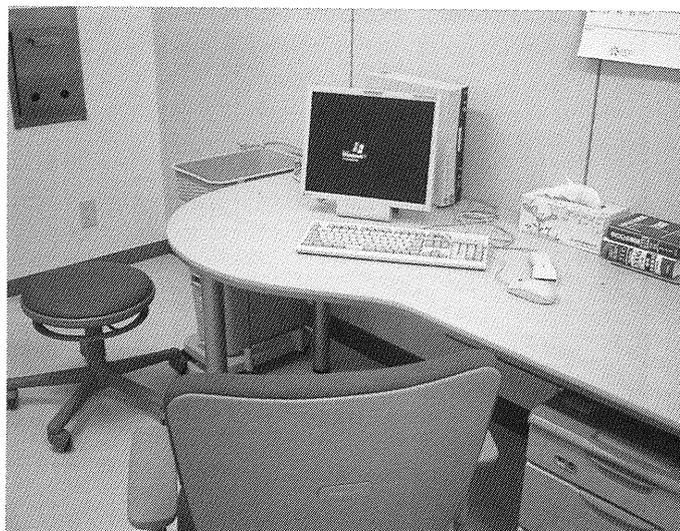


写真11 公立南砺中央病院待合ロビー



規定している。

病床数は190床（一般145床、医療型療養病床21床、介護療養病床24床）で16診療科、人工透析15床を有している。南砺市民病院とは画像遠隔診断を開始している（図2）。在宅療養支援のための「訪問看護ステーション」を併設し、代診医派遣や巡回診療を行う「へき地医療拠点病院」でもある。現建造物は平成14年に完成されたもので、地震に対してだけでなく、内部の人や設備を守る「免震構造」が採用され、災害時の医療機能を確保するように意図している。

外来診察室はさすがに電子カルテ・PACSが整備されているためか、ペーパーレス、フィルムレス化し、

整然としている（写真10）。

1階の吹き抜けロビーには多くの絵画が展示され、安らぎの環境が提供されていた（写真11）。各病室には絵画や書、食堂にはミニギャラリーが設置してあるそうだが、残念ながら1階部分だけの視察で終わった。

3病院に共通していえることは、職員が自身と誇りをもって仕事に従事されていることや贅沢なほどに広い敷地を有し、ゆったりとした療養環境が提供されていることである。

### 〔世界遺産：五箇山相倉合掌集落見学〕

施設視察研修終了後、約30分バスに揺られ、「五箇

写真12 五箇山合掌造り集落



山合掌造り集落」の見学を行った(写真12)。国内では6番目に世界遺産に指定されたとのこと。この合掌造り集落は一度訪れてみたいとかねがね思っていたので、今回の現地研究会の企画担当者には個人的に心より感謝している。

### 〔地域医療交流会〕

初日最後の催しである「交流会は」、ふくみつ「華山温泉」の大広間「春日殿」、「金扇、銀扇」の2会場で開催された。

今井正信・国診協相談役顧問の開会挨拶を皮切りに、魚津龍一・富山県国民健康保険診療施設開設者協議会会長からユーモア溢れる歓迎の挨拶のあと、溝口進・南砺市長の乾杯で幕が開かれた。その後は富山の踊りなどのアトラクションもあり、座を入り乱れての賑やかな交流会であった。富山の名酒「立山」を存分に味わわせていただき、和やかななかに瞬間に2時間が過ぎ、倉知院長の閉会の挨拶で締めくくられた。その

後、温泉に浸かって満足した気分で床に就き、翌日に備えた。

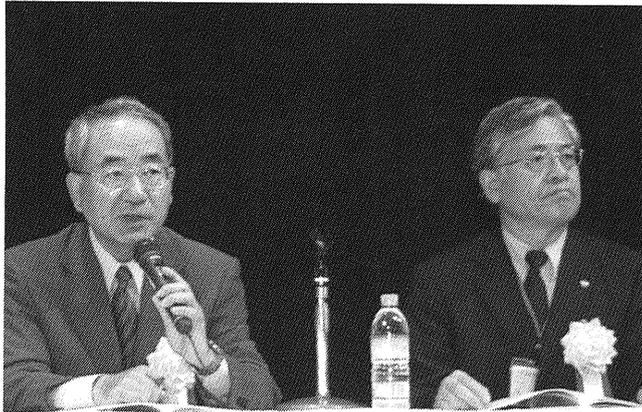
### 研修2日目 - 5月26日(金)

### 〔全体討議〕

午前9時から、南砺市井波総合文化センター「メモリアルホール」において、「市町村合併と地域医療ネットワークの構築～新たな医療文化の創造～」をテーマに、南砺市民病院院長代行 南 眞司先生、氷見市民病院長 加藤弘巳先生を座長として、7名の演者による発表が行われたあと、全体討議が行われた(写真13、14)。

まず、村井眞須美・南砺市井波訪問看護ステーション・ホームヘルプステーション所長から砺波医療圏公的病院地域医療連絡会の紹介があり、その成果として、①各病院における連携業務内容や組織の位置づけ

写真13 座長の南先生(左)と加藤先生(右)



南  
院長  
氏

研

院

の相互理解が得られた、②地域連携パスにより紹介・転院時のルールを作成したことで紹介しやすく、受診しやすい間柄をつくることができた、③事例検討、文献学習を通じ、連携担当者の資質向上を図ることができた——など、この連絡会の成果を報告された。

引き続いて、岩村正美・南砺市訪問看護ステーション「あおぞら」所長から、「今後ますます、医療依存度の高い利用者が在宅へ移行し、また終末期医療を必要とするケースも増えてくることが予想される。これらに対応するには看護師のレベルアップが必要である。地域のどこに帰っても同じケアの質が保証されることが重要である」と述べ、モットーとして、①自分の家庭を犠牲にしない、②無理のない看護で楽しく働きましょう——とゆとりの必要性を強調して結ばれた。

竹内嘉伸・南砺市井波在宅介護支援センター主事からは、「8つの町村合併により、8つの地域医療ネットワークスタイルの再構築が必要となっている。また、今後の在宅介護支援センターの役割が曖昧となっている。介護・福祉サービスについても地域によって差があり、住民が生活を継続するため最低限必要なサービスの水準を明らかにし、基盤整備を図る必要がある」と述べられた。

大浦幸代・南砺市民生部福祉課長寿係主査からは、高齢者福祉計画の基本方針として、①介護サービスの基盤整備、②介護予防・健康づくり、③認知症高齢者

支援対策、④地域での支えあい体制、⑤高齢者の社会参加と健康づくり——の推進をあげられた。

南砺市医療局の内記三郎氏からは電子カルテを含めたIT化についての説明があり、今後は、南砺市の市立医療施設のIT連携の密度を上げることと、行政や開業医とも連携する生涯型電子健康情報管理システム(EHR)へ発展させることが課題であると述べられた。

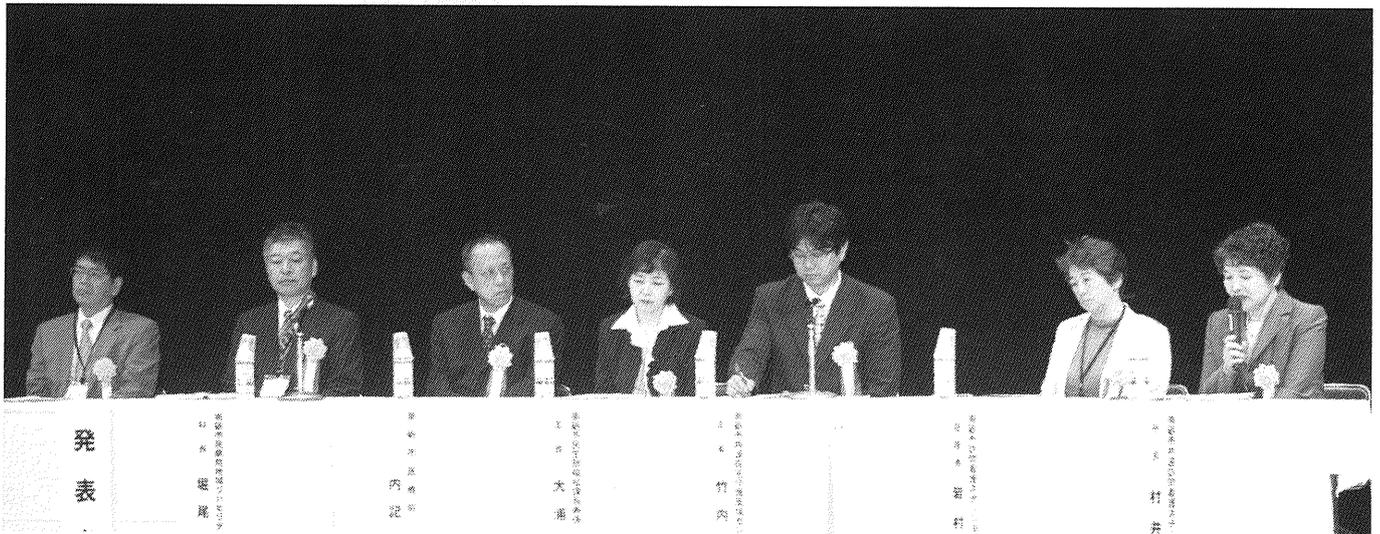
堀尾欣三・南砺市民病院地域リハビリテーション科長からは、砺波地域リハビリテーションセンターのネットワークづくりの具体的活動の紹介があった。

最後に、横川博・富山県砺波厚生センター所長から「保健・医療・福祉の更なる連携強化が必要であるが、そのためには人材の育成、情報提供、連携の環境づくりが大事である」と述べられた

各演者の発表終了後、司会の南院長代行より「市町村合併で福祉に地域格差が出てきており、これをどう解消していくかがテーマとなっている。高齢者の99.9%が自宅に帰りたと思っているが、実際は帰れない。その阻害因子として、寝たきり・自分のことができない認知症等や在宅支援の基盤が不十分であるという2点に絞られる。保健・医療・福祉はどうあるべきかがいま問われている。この点に関して皆さんと討議できればと思っている」と述べられ、全体討議が開始されたが、時間に追われ十分な討議ができなかったのは残念であった。

加藤弘巳・氷見市民病院長は、「井波を中心とした素晴らしい介護・福祉のネットワークについて聞かせていただいた。いままで病院を中心としてやっていた医療から大きく変革を遂げている。とくに、高齢社会では単独では存在し得ない。保健・福祉との連携ネットワークが必要であると改めて実感させられた。また、医師は地域によって格差があることを実感した。介護・福祉のマンパワーの確保が十分になされ、ネットワーク化されている。行政も加わり、さらにITによって大きく裏打ちされている。市町村合併でこれまで井波にとどまっていたものが拡がっている姿を見て、今後、われわれが地域医療を展開するうえで本当に見本になった。市町村合併によってさらに発展しているモ

写真14 発表者の村井、岩村、竹内、大浦、内記、堀尾、横川の各氏（写真右から）



デルだと思う。われわれもこれをもって帰り参考にしたい」とコメントされた。

助言者として横井克己・国診協副会長から各演者に対して適切な講評が述べられ、「新市における地域医療ネットワークづくりになみなみならぬ気持ちで向かわれており感激した」と結ばれた。最後に富永会長が「南砺市においては保健・医療・福祉システムを立派につくり上げられており、コ・メディカルが十分に活躍できる場を提供している。医師がすべてではなく、場合によってはリーダーをコ・メディカルがやったほうがよい場合もある。直診の理念を再認識して再出発すべきであろう。南砺市はうまくいっている例であるが、その反対もある。首長の理解を得て、院長と連携をとらなければならない。国保直診が赤字の理由は保健・福祉を担っているためである。ITは今後進めていかなければならない。医師確保についても国診協に相談する場を設置しており、利用してもらいたい。昨日、今日と研修した南砺市のシステムは合併後のよいモデルとなっている。地域特性に合ったものを構築していただきたい」と締めくくられた。

### 【閉講式】

閉講式では、次期開催地予定の宮城県を代表して、

平山隆・国診協宮城県支部長から宮城県・涌谷町において「単独立町における地域包括医療の展開」と題して開催の案内があった（開催日：平成19年5月24日～25日、会場：ホテル松島大観荘）。「宮城県では平成の大合併により71市町村が36市町村になり、国保直診が2施設廃止され、これまで培ってきた地域包括ケアの展開が困難になることが危惧されており、涌谷町でも住民投票の結果“単独立町”の町づくりが決定された。日本三景の一つである松島と涌谷で、国診協の仲間として、ともに悩みを分かち合い、語り合い、これからの国保直診のあり方を大いに語り合える機会になることを願っている。関係者一同、多くの皆様のお越しをお待ちしている」との挨拶があった。

閉会の挨拶は、廣畑衛・国診協副会長から、大変有意義な現地研究会で大成功であったこと、富山県関係各位への感謝、そして次回の宮城県・涌谷町での現地研究会への期待と多くの国保直診の仲間たちの参加を要請し閉講式を終了し、南砺市における全日程を終了した。

最後に、あらためてわれわれの研修のために周到な準備と温かいもてなしをいただいた南砺市の関係各位に心より感謝する次第である。